

限られた授業時間を生かす指導の工夫

魚を育てる森（一年）

説明文のわかり方・楽しみ方



福岡教育大学附属小倉中学校教諭

加来 和久

1 説明文がわかるとは、どういうことか？

物語を的確に把握した人が、要を得たあらずしを語れるように、他人の話がわかったかどうかは、多言を必要とせず、必要最小限の言葉で要点をいえることである。同じように、ある文章がわかった人は、適切にその文章の内容を再構成することができるのではないだろうか。そして、より理解が確かな人は、説明する際に相手にわかりやすい、理解しやすい適切な言葉（最低限の学術用語はしかたないが）でその内容を伝えることが可能な人である。

説明文の学習は、その文章の内容（環境問題など）や学習活動（文章構成の把握やキーワード・キーセンテンスの読み取り）の性質上、文学的文章の場合などと比べ

2 導入場面での意欲付け 一時間目前半

生徒たちに、まず理解してほしいことは、説明文の特質である。説明文は、ある事実に基づいた意見を、構成を考へて、表やグラフを援用しながら読み手にわかりやすく伝えようとしている文章だということである。当然、少し難しい専門用語が出てくるが、その中での構成（序論・本論・結論）や表現はとても工夫されたものとなっている。その文章をよく読み取って、もっと簡単に再構成すること（パンフレット化すること）は、読解力を高める上でも表現力を高める上でも、とても有効である旨を説明する。確かに、読むのがやっと、という生徒は、抵抗感を示すが、習ったこと（キーワードなど）を順番に書き直すだけでもよい、（評価的には、合格）と告げると、安心して取り組み始めるようになる。

百問は一見に如かず
といつことで、教師側で
作成した見本が、別の単
元で作成した作品を例と
して見せるとイメージが
湧きやすく、活動への意
欲も高まるようである。

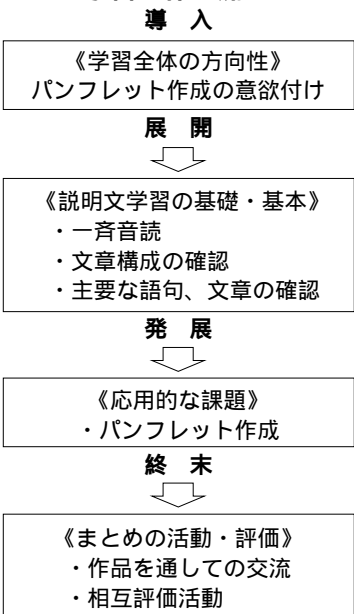


例 「自然の小さな診断役」で作成された作品

てかたい感じを伴い、ともすると無味乾燥になりがちで嫌われる傾向にあるのは否めない。そこで、その文章をもとに一人一人がその読み取りを生かし、自分の考えや意見も加えたパンフレットを作成する活動を仕組み、単なる文章理解にとどまらず、創作的な楽しみを感じ取れるのではないかと考えた。

説明文を的確に読み取ることから始まって、最終的には一人一人の個性的な作品へと発展していくので、生徒にとって知的な楽しみのある学習活動だといえる。

【学習全体の流れ】



3 説明文学習の三つの基礎・基本

一時間目後半～五時間目

i 音読がすらすらできること。（一時間に三百字程度の速さで読めること。）

速く読める能力と内容を理解する能力は、相関関係にあると考えられる。よどみなく読めるけれども、意味がわかっていないということは少ない。逆に、たとえどしくしか読めないが、内容がよくわかっているということには、まずない。できるかぎり機会をとらえて、すらすらと一斉音読をさせる。はつきりいえることは、一回目よりも二回目、二回目よりも三回目と確実に読めるようになっていくということである。

ii 文章構成文章の組み立て・形式段落と意味段落の関係
序論・本論・結論それぞれの役割を理解すること。

説明文は、ある意見・主張を事実に基づいて述べる文章であるから、その構成を理解することは、論文を代表とする実用的な文章を書く際に役に立つ。「魚を育てる森」を学習する際の進め方は、教師から「十六の形式段落を三つに分けるには？」という発問をし、生徒に複数
の答えを出させる。（例）
誤答 など（理由を言わせながら絞り込んでいくと、正答が自ずと決まってくる。）

iii キーワード、キーセンテンスの確認(意味段落)ことの主要な語句や文章のマーキングなど)。

学習が終わった後で、文章中の大切な語句や文が、一目見て他と区別できるようになっていなければならぬ。時がたつてその文章を振り返ったとき、大切なところや学習の軌跡が即座にわかるように、自分の身の回りの関連する例や問題、気づいたことや考えたことを教科書の中に書き込み、また、ラインマーカーによるマーキングなどをさせる。一般の大人でも大切な箇所には、赤線を引いたり、付箋を施したり、書き込みをしたりして読み取っていく。その技術を意識的に行わせることにより、読み取った知識・理解をより確かなものとさせるねらいで行う。

この説明文の場合は、序論では、筆者の問題提起となる文章「森は、海にとってどのような役割を果たしているのだろうか。」、本論では「腐植土」及び腐植土の役割、「海の生物を守る役割」、「海の生物を育てる役割」などの語句、結論では、筆者の意見「できるかぎりバランスを壊さないように」といった文や語句に注目させることになる。また、図や表は、どの文や文章を詳しく説明しているかを答えさせたり、逆に文章を表にまとめたりにすることで、図や表を巧みに援用する説明文の特質に

5 まとめとしての相互評価活動 九時間目

できあがった作品を活用して、生徒同士で学習したことを再確認したり、そのよさを見つけ合ったりする活動を行う。相互評価表や付箋を用いて、友達の作品のよいところを見つけたり、立派な作品を褒めたりすることで学習全体のまとめとする。それぞれ、独自の工夫が見られたり、ことに、口ごもる見立たいな友達がいがいけず、工夫に富んだ作品を作っていたりするので、お互いに励まされる場面となる。友達の作品を見ての感想や自分自身の作品を作ったときの苦労などをお互いに発表し合うことも有意義な活動だといえる。



【相互評価表】

友達の作品を見てそのよさを見つけよう。	
1年()組()番	氏名()
友達の作品を見て、その内容面や表現面(外見)の工夫を考えよう。	
内容面: 本文の内容を適切にまとめているか。	表現面: 文字やイラストなど読みやすくなっているか。
よいと思った人の名前()	
内容面	
表現面	

ついても気づかせるようにする。

4 作品の制作活動 六時間目〜八時間目
作品制作に関しては、基本の材料(B4色画用紙及び白画用紙、本文を縦書き・横書きで印刷したもの)は教師側で用意し、はさみやのり、好みのマジックなどは個人で準備をさせる。パンフレットに表す内容は読みの学習の中ですでに理解しているもので、時間の遅い早いはあるものの、全員が作成することができる(凝ったものを作ろうとするときりがないので、作品を評価し合う期日を予告して、その中で最善を尽くすように伝えておく)。半数以上の生徒は、教師が予想する以上の立派な作品を作ってくる。



6 この単元での評価

この単元で主に評価の対象として見取るものとして、次の活動場面や機会が考えられる。(評価規準例)

- ア 国語への関心・意欲・態度
 - ・一斉音読中の態度(例 口を開けて読んでいる。)
 - ・ノートの記入、提出(例 板書の正確な記録)
 - ・教科書の記入、提出(例 マーキングの正確な記入)
- イ 話す・聞く能力
 - ・作品評価活動の際の発言量・発言内容分析
- ウ 読む能力
 - (例 友達の作品のよいところを見つけて発言をする。)
 - ・教科書の記入内容(例 マーキングの正確な記入)
 - ・読み取る際の応答(例 質問への的確な応答)
- エ テスト(例 キーワードを正確に抜き出す。)
- オ 相互評価表(例 友達の作品のよさを抜き出す。)
- カ 書く能力
 - ・パンフレットの内容(例 内容を的確に反映、自分の意見を加える。)
 - ・テスト(例 ひとまとまりの文章を表にする。)
- キ 言語についての知識・理解・技能
 - ・パンフレットの内容(例 適切な語句の使用)
 - ・テスト(例 文章構成を表す語句、漢字の理解など)